シリーズ「キャリア教育」

第８回 インターンシップ

2005年からの文部科学省の「キャリア・スタート・ウィーク・キャンペーン」の影響もあり、100%に近い中学校での職場体験。一方で、課題とされていた公立の普通科高校でのインターンシップの実施率も75.6%となっている。今回は、インターンシップを中心に、千葉市立千葉高校と神戸大学附属中等教育学校のキャリア教育を紹介する。

学部・学科選びだけでなく、生徒に社会人として働くことを考えさせたいという思いから、インターンシップを開始

千葉市立千葉高等学校

千葉市中心部や東京のベッドタウンである千葉市稲毛区に立地する千葉市立千葉高等学校は、ほとんどの生徒が首都圏の国公立大学や有名私立大学に進学する進学校である。同校では、2010年からキャリア教育の一環として主に夏休みに、希望者に対するインターンシップを実施し、大学卒業後の職業を考えさせる機会としている。今回は、インターンシップを中心に、進路指導主事の齋藤俊介先生に、キャリア教育について話を伺った。

受け入れ先・参加人数とも毎年徐々に増やしながら夏休みに実施

千葉市立千葉高等学校のキャリア教育は、総合的な学習の時間を「キャリアプランニング」として、１～３年次までに系統的に進路や将来の在り方について考えさせている。

従来、同校では生徒の大学選びや学部・学科選びを支援する取り組みが中心だった。齋藤先生は以前より、大学卒業後に長い社会人としての生活があるのだから、高校時代に将来の職業を考える機会があると良いのではないかと考えていた。そこで３年前に進路部長となったことをきっかけに、2010年度からインターンシップを導入することにした。

しかし当初、ほとんどの生徒が中学校でインターンシップを経験してきているため高校でどう差別化するのかという意見や、進学校でインターンシップを行うことについて懐疑的な意見もあったことから、まずは夏休みに、希望者に対して実施している。

インターンシップ受け入れ先については、「中学校では、地元の商店などで職業体験をしてきた生徒が多いが、高校では生徒の知的好奇心を刺激し、学部・学科を選ぶ参考となるようなインターンシップにしたい」という視点で探すことにした。対象は全学年とし、受け入れ先の職場が決まったら、実施日や募集人数、内容等を記した案内を各教室に掲示して応募を受け付けている＜図表１＞。参加はいずれの学年でもよく、複数回インターンシップに参加する生徒もいるそうだ。

齋藤俊介先生

１年目のインターンシップ先は、千葉県庁と千葉市役所で参加者は５名。２年目は、齋藤先生が千葉銀行と朝日新聞千葉支局に受け入れを打診したところ快諾してもらい、県庁、市役所と併せて26名が参加した。３年目の今年はさらに、千葉県弁護士会の協力を得た弁護士体験と、千葉県民主医療機関連合会の協力を得た医師体験・看護師体験が加わり、44名が参加した＜図表２＞。「同様に千葉県民主医療機関連合会主催の薬剤師体験に応募しましたが、今年は残念ながら選に漏れてしまいました。また現在、秋の土日か冬休みに、千葉県警察での鑑識体験ができるよう、打診中です」（齋藤先生）

受け入れ先の仕事に関する講義と仕事体験、見学により進路観が明確に

では、生徒はどのようなインターンシップを体験しているのだろうか。インターンシップ先によって異なるが、おおむね、その企業や職業についての概要を講義しても

らい、その後生徒が実際に現場を体験するという流れになるように依頼している。

千葉銀行では、まず銀行の役割について講義をしてもらい、その後、名刺交換、電話の応対の仕方など社会人としての基礎を指導してもらう。続いて紙幣を数える体験をしたり、窓口ではない銀行の他の業務について学んだりした後、地下の大金庫と、同行のコマーシャルを撮影するスタジオを見学した。「案内の方が行員の方に市立千葉高校の生徒が来ていると紹介してくれたところ、本校の卒業生だと手を挙げてくれた方が３名ほどいました。先輩が働いていると知って銀行を身近に感じ、自分も将来銀行員になりたいと思った生徒もいたようです」（齋藤先生）

朝日新聞社でも、まず、新聞の役割や新聞記者の仕事、なぜ新聞記者を職業に選んだのかなどについて講義を受けた後、取材に同行した。今年は、千葉マリンスタジアムで開催されていた全国高校野球選手権千葉県大会の準決勝の取材に同行した後、成田空港に移動し、警察が日々起こる事件について報告する記者会見に同席した。ちなみに、昨年は森田健作千葉県知事の定例記者会見に同行した。成田空港や県知事の記者会見では、生徒も一緒にメモをとり、要点をメモすることの難しさを実感した。

弁護士体験は、まず、千葉地方裁判所で裁判を傍聴した後、千葉県弁護士会館に移動し、傍聴した裁判や、裁判の仕組み、弁護士の仕事などについて講義を受けた。続いて弁護士の個人事務所を訪れ、１日を終えた。

「高校の『政治・経済』の教科書には日本の裁判は三審制であると書いてあります。しかし、弁護士の方から実際に最高裁判所まで争うのは違憲かどうかが争われる裁判に限られ、実際はごくまれであると聴いたり、説明してくれた弁護士の方が法学部出身でないと知ったりして、生徒は驚いていました。また、偶然、弁護士会館に研修に来ていた千葉大学の法科大学院の学生に話を聴くこともできました」（齋藤先生）

インターンシップの効果について、「千葉銀行に行った結果、大学で経済を勉強したいという気持ちが固まる、弁護士体験をしたことで法学部に進学しようと決めたなど、それまで曖昧に大学に進学したいと思っていたが、大学で学びたいことがはっきりしたという生徒はかなりいました」と齋藤先生はインターンシップの効果を実感している。

＜図表１＞インターンシップ募集の案内

夏休み
１日弁護士体験（ｲﾝﾀｰﾝｼｯﾌﾟ）のお知らせ

2012/7/4　進路指導部

①実 施 日　：夏休み中　１日

②募集人数　：校内で先着１５名
（定員に達し次第、募集終了とする）

③実習場所　：千葉地方裁判所　：千葉市中央区中央4-11-27
千葉県弁護士会館：千葉市中央区中央4-13-12

④内　　容　：千葉地裁にて、本物の刑事裁判を傍聴する。
その後、弁護士会館に移動し、弁護士の仕事の内容や、弁護士になるために必要なこと（司法試験）についての講義を聴く。

⑤申込〆切　：７月１１日（水）

※法学部を目指す生徒で、興味関心がある者は是非参加してください。実際の刑事裁判を傍聴することができるので、弁護士だけでなく、裁判官や検察官といった全ての法曹の仕事を見学できます。人数制限がありますので、参加希望者は　早めに進路指導室まで来てください！

＜図表２＞2012 年度インターンシップ先と参加人数

千葉県庁	２名	千葉県弁護士会	14 名
千葉市役所	１名	医師体験	４名
千葉銀行	７名	看護師体験	10 名
朝日新聞社	６名		

なお、インターンシップへの参加動機については、３年生は、「法学部に興味があるので弁護士体験に参加した」など、自分が進みたい進路に関連する職場を体験してみたいという理由が多いが、１年生は、「毎日配られる新聞がどのように作られるか知りたかった」「世の中にどんな仕事があるか興味があった」というように社会や仕事への好奇心から参加する生徒が多いなど、学年や個人によってさまざまである。

インターンシップ終了後は、事後学習として原稿用紙２枚の感想文を書き、企業にはそのコピーをお礼状とともに送っている＜図表３＞。感想文の中で良く書けているものは、月に１回発行される進路だよりや、PTA が

＜図表３＞生徒の感想文から～抜粋～

●僕は朝日新聞社のインターンシップで次から次へと出てくる驚きの事実に耳を疑うばかりでした。僕の家では朝日新聞をとっているので朝日新聞のことをわかっていると思っていましたが、全くわかっていませんでした。例えば一面の下の方にある「天声人語」という欄は入試にでたことがあるということを聞いてとても驚きました。帰った後に少し読んでみて興味深いことがたくさん書いてあったので、毎朝、天声人語を読むということをこれからの習慣にしようと思います。（中略）今回、このようにいろいろな取材を全て集めて新聞が成り立っていることを知り、もっとしっかり新聞を読んでみようと思った。（１年生男子）

●その日に見た裁判は２つでしたが、そのうちのひとつは市立千葉高校出身の方が弁護士をしていました。弁護士という職業を、とても近く感じることができました。２つの裁判を見終わった後、弁護士会館で現役の弁護士の方と千葉大学の法科大学院の方からお話をしてもらいました。そのとき一番驚いたのは、弁護士の方々の中で、結構高い割合で法学部卒業ではない方がいるということです。とても意外なことや、ためになる話が多かったです。（中略）最後に弁護士の方が勤めている法律事務所を見学することができました。弁護士の仕事場を直接肌で感じることができて、とても実感が湧きました。このインターンシップを自分の進路に役立てていけるようにしたいです。（３年生男子）

年に２回発行する新聞に掲載することを通して、インターンシップの周知に努めている。さらに１年生に関しては、４名程度の生徒がインターンシップ報告会でその内容を発表している。発表者は感想文をもとにパワーポイントで発表資料を作成し、１年生326人を前に発表する。「今年インターンシップに参加した生徒の中には、昨年の報告を聴いて自分も参加してみたいと思った生徒もいますので、報告会の効果は高いと感じています」（齋藤先生）

今後の課題は受け入れ先の開拓と実施時期・期間、校内体制の検討

インターンシップの実施体制については、これまで10名の進路指導部の教員が手分けして、すべての受け入れ先に終日引率しているが、インターンシップ先、参加人数ともに増やしたいと考えているため、今後は、同校のキャリア教育全般を担っている、総合学習委員会の協力を得ることを検討中である。

インターンシップの課題として、齋藤先生は「インターンシップ先の開拓」を第一に挙げる。「今後、霞ヶ関の官庁は無理でも、国税庁であれば税関、外務省であればパスポートセンターなど、国の出先機関でも受け入れてもらえないか打診してみるつもりです。また、現在は千葉県内の行政機関や団体、企業が中心ですが、東京へも電車で40分ですので、東京の行政機関や企業、証券取引所などにも依頼したいと考えています」と計画を語る。

一方、現在は文系のインターンシップのみだが、同校はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）に指定されており、SSHの取り組みとして、千葉市動物公園で実習を行ったり、近くにある放射線医学総合研究所の見学を行ったりしている。齋藤先生は「SSHの取り組みとの兼ね合いを図りつつ、今後は理系のインターンシップの実施についても検討していきたいです」と話す。

このほか、現在インターンシップは主に夏休みに行っており、１日体験がほとんどだが、受け入れ先から「お盆休みのある夏は忙しい」「秋の平日にできないか」といった要望が多いため、齋藤先生は受け入れ先開拓の面や、実施期間を延ばす意味でも、実施時期を検討できないかと考えている。

千葉大学を始めとする高大連携等により大学での学びへの理解を促す

最後に、主に総合的な学習の時間を活用して行っている、同校のキャリア教育の取り組みをいくつか紹介しよう。

１年生では、高校生活の意義や、自己の適性の能力を考えさせるとともに、生徒が進路選択の幅を広げることができるよう、さまざまな取り組みを行っている。

１年生の９月には、夏にインターンシップに行った生徒の報告会が行われる。続いて10月、11月には、それぞれ15の学問分野の講師を招いた「大学模擬授業」を開催している。90分間の講演の内容はあえて大学と同等としている。大学での勉強とはどのようなものかを理解させ、体験させることが狙いである。

11月には、地元で活躍している社会人、もしくは同校OBの社会人を招いた「社会人によるキャリア教育講演会」を実施している。講演の内容は、仕事内容や、働くとはどういうことかについてであり、一昨年は朝日新聞千葉支局の記者、昨年は現在外交官として活躍している同校OBを講師に招いた。今年はJR稲毛駅の駅長を招く予定である。

2年生は、11月に「学部学科ガイダンス」「国公立大学ガイダンス」を開催している。これは、1コマ45分のうち30分程度は大学の講義を短縮して話してもらい、残りの15分で「商学部と経済学部はどう違うか」など、学部や学科で学ぶ内容について大学教員に話をしてもらう。大学教員には2回同じ話をしてもらい、生徒は2講座受講する。同じ学部系統でも学部の違いを理解し、その後の大学・学部選びに役立たせるという狙いがある。

3年生は5月に、一般入試で受験する生徒を含め、全員が進学したい学部とその理由を「志望理由書」として原稿用紙1枚に書く。「書くことで、生徒が大学で何を学びたいかを考えるきっかけとしています。またこれを踏まえて6月に三者面談を行いますので、進路について保護者と生徒がきちんと話し合う材料になればとも考えています」(齋藤先生)

さらに、秋(今年は11月15日)には「教職を目指す人のセミナー」を実施し、学年を問わず教職を希望する生徒が毎年60名程度参加して、千葉県教育委員会の人事担当者から教員採用試験の現状についての説明を受けるとともに、今年度採用された小学校教諭から、教職を志したきっかけや学生時代の話、教員になった感想などについての講演を聴いている。

このほか、千葉大学と高大連携協定を結び、千葉大学の5限目講座の一部を同校の生徒に受講させる「HOC(High School on Campus)」という取り組みを実施している<図表4>。今年度後期は、15講座が開放され、募集人数80名に対し、希望者52名が参加している。「同校から千葉大学までは自転車で15分程度なので、毎年多くの生徒が参加しています」(齋藤先生)。なお、1講座半期を1単位とし、修了者には高校の単位が与えられる。

以上のように、同校ではインターンシップを含め、大学で学ぶ意義を知った上で生徒が大学進学を志すための支援を重視したキャリア教育を実施している。

<図表4> 2012年度　HOC開講講座一覧(後期)

講座名	受入人数	募集人数
英語Ⅱ(映像文化) 7	5名程度	5名
現代日本の教育課題を考える	5名程度	5名
経験を考えるⅡ	5名程度	5名
実験で体験する物理	5名程度	5名
英語Ⅱ(口語英語) 11	5名程度	
ドイツ語1	5名程度	2名
フランス語1	5名程度	
地球環境の行方	5名程度	
放射線と生命科学	10名程度	10名
ラテン語への招待	5名程度	4名
言語・文化・コミュニケーション	5名程度	2名
スペイン語2	5名程度	4名
イタリア語2	5名程度	4名
千葉大学における研究・教育の現在	5名程度	4名
画像工学入門	5名程度	2名

〔後期　2012年10月1日(月)～2013年2月13日(水)〕

千葉市立千葉高等学校(全日制)

◇**所在地**:千葉市稲毛区小仲台9－46－1

◇**沿革**:
1959(昭和34)年　千葉県千葉市立高等学校開校
1964(昭和39)年　千葉市立高等学校と校名変更
1970(昭和45)年　理数科新設
1979(昭和54)年　千葉市立千葉高等学校と校名変更
2001(平成13)年　千葉大学との連携教育開始
2002(平成14)年　スーパーサイエンスハイスクールに指定(～2006年)
2007(平成19)年　進学重視型単位制導入
2008(平成20)年　新校舎落成
2012(平成24)年　スーパーサイエンスハイスクールに再指定(～2016年予定)

◇**学級編成**:各学年普通科7クラス、理数科1クラス

◇**生徒数**:968名(男子482名、女子486名)2012年5月現在

◇**特色**:校訓は「強く　明るく　より高く」。2007年度に導入された進学重視の単位制、45分7限の授業時間などによって進路希望に合わせた多種多様な選択科目を用意し、生徒の希望する進路実現を支援している。2008年に落成した新校舎は、県内屈指の施設・設備を誇る。普通科は千葉市内から生徒を募集しているが、理数科は千葉県全域から募集している。文武両道を目標にしており、部活動も盛ん。

◇**卒業生の進路:2012年3月卒業生**　322名
・合格の内訳(延べ数):国公立大学47名、私立大学606名、短期大学6名、専門・各種学校12名

生徒自身が訪問先を見つける職業インタビューやインターンシップを実施「Kobe プロジェクト」を通じて「生きて働く力」の獲得をめざす

神戸大学附属中等教育学校

高木優先生

森瀬智子先生

神戸大学附属中等教育学校では、「国際的視野をもち未来を切り拓くグローバルキャリア人を育成する」を教育目標に掲げ、教科の学習や、総合的な学習の時間を中心にした「Kobe ポート・インテリジェント・プロジェクト（以下、Kobe プロジェクト）」などを通じて、「見つける力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」を育成している。

今回は、Kobe プロジェクトの概要と、その中に位置づけられた、自分の生き方を考えることにつながっていく経験としての「キャリア教育」、第３学年（中３）でのインターンシップについて、同校住吉校舎の進路指導部長の高木優先生と、第３学年（中３）主任の森瀬智子先生に話を伺った。

グローバルキャリア人育成のため４つの力について学習目標を設定

神戸大学附属中等教育学校は、神戸大学発達科学部附属明石中学校と附属住吉中学校を母体に、後期課程（高校に該当）を開設して 2009 年に発足した６年一貫の中等教育学校である。現在、第４学年（高１）までの生徒が在籍している。

神戸大学がグローバル・エクセレンスの育成をめざしていることもあり、教育目標に「国際的視野をもち未来を切り拓くグローバルキャリア人を育成する」を掲げている。これに伴い、学校全体の研究テーマとして、「グローバルキャリア人としての資質・能力を育成する中等カリキュラムの研究と授業の創造」に取り組んでいる。

まず、グローバルキャリア人となるために生徒に育成する力として、「見つける力」「調べる力」「まとめる力」「発表する力」の４つを挙げている。「この４つの力は、新学習指導要領にある『言語活動の充実』や、OECD による PISA 型の学力観とも共通します」（高木先生）

そして具体的な学習目標として、

①身近な事象や資料から、課題を「見つける力」を高めることができる

②課題を探求するために「調べる力」を高めることができる

③調べた内容をレポート作成などを通して、「まとめる力」を高めることができる

④プレゼンテーションを通して、わかりやすく「発表する力」を高めることができる

を設定した。

Kobe プロジェクトを核にさまざまな活動を展開

グローバルキャリア人育成には、多面的なアプローチが必要である。例えば、

・語学力・ＩＣＴ活用力等による実学的要素

・チャレンジ精神、柔軟性、責任感等の人格的要素

・地元神戸や日本の理解、異文化理解力

などである。こうした人材の基盤となる資質として、文系・理系どちらか一方に偏重しない国際人として通用するリ

＜図表１＞進路計画 ―「将来を考える」

１学年	基礎期	職業の模擬体験（神戸マイスターなど） 教育実習生・卒業生による体験談 大学との連携授業
２学年		インターンシップ事前指導 教育実習生・卒業生による体験談 大学との連携授業
３学年	充実期	分野別出前授業、神戸大学デー インターンシップ インターンシップ事後指導 教育実習生・卒業生による体験談 大学との連携授業
４学年		分野別出前授業、神戸大学デー 将来を見つめる（ライフプラン・職業調べ・学部調べ・大学研究） 学長講話、大学との連携授業、ＫＵタイム
５学年	発展期	学長講話 大学との連携授業 ＫＵタイム
６学年		学長講話 大学との連携授業 ＫＵタイム

（進路計画の中から「将来を考える」を抜粋して掲載）

＜図表２＞「Kobe プロジェクト」の主な学習内容

学年	教育課程の内容	４つの力の育成	グローバル学習	キャリア学習
１年	人間環境系列 人間形成系列	協同学習リテラシー （聞き方・話し方訓練など）	神戸について	職業調べ
２年	人間環境系列 人間形成系列	協同学習リテラシー （言語技術学習訓練など）	神戸と奈良について	職業インタビュー
３年	課題学習	学年別課題学習 ・探究の基礎など 講座別課題学習	神戸と沖縄について	インターンシップ 分野別出前授業 神戸大学デー
４年	課題学習	学年別課題学習 ・情報リテラシー ・探究の基礎など 講座別課題学習	日本とカナダについて （海外語学研修希望者）	分野別出前授業 神戸大学デー
５年	卒業研究	大学との合同研究	日本（神戸）とイギリス （ロンドン）について	分野別リレー授業
６年	卒業研究	大学との合同研究		

※ 宿泊行事　１年六甲山（２日）、２年奈良（３日）、３年沖縄（４日）、４年神戸近郊（２日）〔カナダ（約２週間）〕、５年イギリス（約１週間）
※ フィールドワーク（各学年多数、人と自然の博物館、人と防災未来センター、神戸市立博物館、須磨寺など）
※ 職業調べ（神戸マイスターと協力）
※ 職業インタビュー（１日職場見学）
※ インターンシップ（５日職場体験）
※ 分野別出前授業（神戸大学、関西学院大学、関西大学と協力、１人２講座）
※ 神戸大学デー〔神戸大学全学部（11 学部 12 学科）、１人１講座〕

＜図表３＞2つの「系列」と8つの「領域」

「人間環境系列」	「人間形成系列」
・自然と人間	・教育・発達と人間
・数理・情報と人間	・感性・表現と人間
・生活と人間	・言語・文学と人間
・社会と人間	・行動と人間

自然と人間、数理・情報と人間、生活と人間、社会と人間、教育・発達と人間、感性・表現と人間、言語・文学と人間、行動と人間をそれぞれ領域と呼び、全体を８領域と呼んでいる。

ベラルアーツ教育が重要性である。同校ではこうした教育の核として、総合的な学習の時間を活用した「Kobe プロジェクト」を位置づけている＜図表２＞。

＜図表２＞にある「教育課程の内容」「４つの力の育成」「グローバル学習」「キャリア学習」の４つの分野の学習は個別に行われるのではなく、それぞれの活動を通して常に並行して行われ、ある分野の学習が別の分野の学習につながる仕組みになっている。特に言語能力を高める４つの力は、全ての活動を通じて育成される。

以下、各分野の具体的な学習内容と、各分野の関わりについて見ていこう。

まず、「教育課程の内容」では、第１・２学年は「人間環境系列」「人間形成系列」からテーマを設定し、学年全員が同じテーマについて学習する＜図表３＞。第３学年は、８領域の中からそれぞれ自分の興味のあるテーマについて調査・分析をしてまとめ、発表する課題学習を行う。第４学年の課題学習では第３学年と別のテーマを設定し、まとめと発表に加え、論文も執筆する。第５・６学年は神戸大学の支援を受けながら、２年間で１つの「卒業研究」を行い、論文に仕上げて発表する計画である。

「４つの力の育成」は、これに特化した学習として、第１学年では協同学習リテラシー（聞き方・話し方訓練など）を、第２学年では第１学年より高度な協同学習リテラシー（言語技術学習訓練など）を行う。

「グローバル学習」は、各学年の宿泊行事を中心に、事前学習、事後学習も実施する。第１学年は神戸市六甲で１泊２日の宿泊オリエンテーションや神戸各地でフィールドワークをし、第２学年は２泊３日で奈良に行く。第３学年は３泊４日で沖縄に行き、第４学年は外部の施設を利用して１泊２日の宿泊オリエンテーションを行う。第４学年の夏休みには、約３分の１の生徒が２週間のカナダへの語学研修に参加する。第５学年では、１週間のイギリスへの修学旅行がある。

このように、まず地元である神戸、次に古都である奈良、独自の歴史と文化をもった沖縄、そして海外のカナダ、イギリスと、徐々に遠い地域について学ぶ流れである。なお、宿泊に際しては、訪問先の土地について調べて観光するだけでなく、現地でのフィールドワークや、現地の中学校や高校と合同でのプレゼンテーションが組み入れられている。

「現在の３年生の場合、１年生では、神戸の水環境について調べました。２年生では、事前に神戸で外国人のビジネスマンや観光客に英語でインタビューをしました。奈良では社寺などに行った際に、外国人に神戸と同じ内容のインタビューをして、神戸の結果と比較・分析し、奈良女子大学附属中等教育学校の５年生（高２）との合同のプレゼンテーション会で発表しました。そして３年生になった今年は、事前に２泊３日の神戸旅行のツアーを企画して、沖縄観光協会で配布し、現地の大学生と交流を行いました」（高木先生）

生徒自身が訪問先企業を探して依頼する職業インタビュー

「キャリア学習」は、進路面では第１学年から第３学年にかけて徐々に職業観を養い、第３学年からは学部・学科や学問について学んで、卒業後について考えるという流れである。現在の３年生の場合、１年生の「職業調べ」では職業体験施設に出かけ、さまざまな職業を体験した。なお、現在の２年生が１年生のときには、神戸市が優秀な技能・技術をもつ人を認定した「神戸マイスター」の来校を得て、仕事の内容や仕事に向かう姿勢などを聴いた。

２年次の「職業インタビュー」は、生徒が自分の興味のある仕事に関係する企業や団体を１日訪問して、仕事の見学やインタビューを行う。

同校の職業インタビューの最大の特徴は、生徒自身が企業や団体に訪問の受け入れを依頼するという点である。10月頃から生徒が訪問したい企業等を、自分で探して依頼を始める。実際に訪問するのは、３年生になる前の春休みか３年生の夏休みである。日程は訪問先企業の都合によって決める。

担当した森瀬先生は「まず生徒は、職業インタビューに行きたい企業等を探し、『職業インタビュー』の目的と自分がなぜその仕事に興味をもち、何を知りたいかを綴った手紙を出します。その手紙には、保護者からの手紙と、学校からの趣旨説明と依頼の手紙、受け入れの可否を聞く返信用葉書を同封します。しかし、全ての企業から受け入れ可能との返事がもらえるわけではありません」と話す。訪問を断られた場合、生徒は再び次の企業や団体を探し、依頼の手紙を出す。

「希望する職種によっては見学やインタビューが難しいものもあり、中には何度も断られる生徒もいます。最初に断られたときは生徒はがっかりしますが、やがて前向きに次の依頼先を考えられるようになります」（森瀬先生）

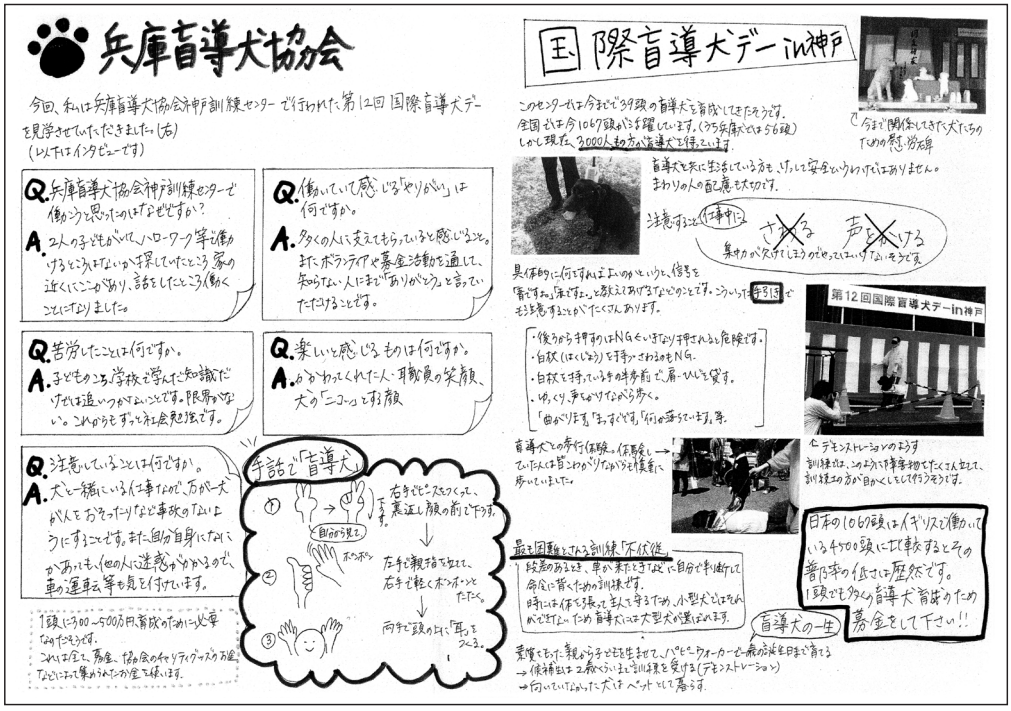
高木先生も「最初は大企業やテレビのコマーシャルで目にするような企業を挙げる生徒が多いのですが、一度断られると、例えば野球に興味がある生徒だったら球団ではなく、野球用具を生産する会社にアプローチするなど、自分が興味のある仕事に関連する企業等には他にどんなところがあり、他のアプローチがないか考えるようになるなど、思考も深まっていくようです」と、一度でうまくいかない場合の生徒の成長も実感している。

とはいえ、なかなか決まらない生徒に対しては、別の生徒の訪問を受け入れてくれた企業に、もう数名受け入れができるかを打診して生徒にその企業をすすめたり、文化祭などの機会を利用して受け入れ先が見つからない職業の一覧を貼りだして保護者に協力を仰いだりしている。

「訪問の結果、例えばユニバーサル・スタジオ・ジャパンを訪問した生徒は、アトラクションパークの仕事だけでなく、人事や営業、企画といった部署があることがわかるなど、さまざまなことを学んできます」（森瀬先生）

「職業インタビュー」の事後学習としては、学んだ内容をＢ４用紙にまとめて校内に掲示し＜図表４＞、お互いの経験を

＜図表４＞生徒が作成した「職業インタビュー」まとめ



共有するとともに、自分では考えつかなかった多様な職業があることを知る機会としている。訪問先の企業には、生徒からの礼状、学校からの礼状、「職業インタビュー」まとめのコピーを送っている。

受け入れ先を生徒自身が探す ５日間のインターンシップを３年生で実施

第３学年では、11 月に５日間にわたる「インターンシップ」を行う。これも「職業インタビュー」と同様、受け入れ先は生徒自身が探して依頼する。

「５日間は無理ですが、２日や３日であれば受け入れ可能という企業や団体もあり、５日間同じ企業ではなく、複数の企業に行く生徒もいますが、何とか全員の受け入れ先が決まりました。インターンシップ先は、『職業インタビュー』で訪問した企業に行く生徒、別の企業を探す生徒などさまざまです。受け入れ先の企業を見つける期間を長く設けることで、全員が受け入れ先を見つけることができたと考えています」（森瀬先生）

生徒にとっては、訪問先を探すこと自体が良い経験となるが、教員にとってはインターンシップ先を開拓しなくてよい反面、基本的に生徒一人ひとりの個別対応となるという大変さがある。「本校の現在の３年生は 113 名で、数名同じ企業に行く場合もありますので、職業インタビューでは約 90 社とやりとりしました。インターンシップの内容は、企業からのご提案を受けて、学校の希望を伝えながら内容を相談していく方針です」（森瀬先生）

インターンシップ中は、生徒は日誌を書き、終了後に体験した結果をまとめて、何らかの方法で発表をする予定である。

それぞれの取り組みのスパイラルで 生徒の力を育成

これらの活動や学習を通して職業観を育み、社会に出るまでに大学での勉強が大切だということがわかってきたところで、第３・４学年では６月に、神戸大学や私立大学の教員による専門分野に関する講義として「分野別出前授業」を実施している。分野別出前講義は、人文科学、法学、経済学、社会学、教員養成・保育学、体育学、理学、工学の８分野、10 人の講師に講演をしてもらう。講師には同じ講義を２回してもらい、生徒は２つの講義を受講して、興味がある学問の面白さや研究の醍醐味に触れる。

また、これとは別に９月に「神戸大学デー」を開催し、神戸大学の中から 11 学部 12 学科（医学部は医学科と保健学科）の教員を迎えた学部ガイダンスを実施する。こちらは、生徒は１つを選んで聴講する。「３年生と４年生で２回同じ行事を経験することになりますが、１年を経て興味・関心が変わったり、成長によって違う発見があったりします。また、比較することでより特徴がはっきりするので、２回目も意義のあるものになると考えています」（高木先生）

現在、生徒は第４学年までしか在籍していないが、第５学年では、学問により深く接するために、いくつかの学問について、神戸大学の教員を中心にリレー授業を行ってもらう計画である。

このように１年生から４年生までの学習の経験が課題学習や卒業研究のテーマ設定につながり、卒業研究が「４つの力」の向上や人生観の形成、進学先を考えることにつながっていく。

「『グローバルキャリア人育成』の取り組みを、より充実させるために、現在、ユネスコスクールへの加盟申請も準備中です。今後、『Kobe プロジェクト』を進化させ、６年一貫のメリットを活かして生徒を育成していきたいと思います」（高木先生）

神戸大学附属中等教育学校住吉校舎（全日制）

◇**所在地：**神戸市東灘区住吉山手５－11－１

◇**沿革：**2009（平成 21）年、神戸大学発達科学部附属住吉中学校と神戸大学発達科学部附属明石中学校を母体に神戸大学附属中等教育学校開校
2009～2014 年度は移行期間として、中等教育学校住吉校舎に前期課程３クラス、同校明石校舎に前期課程２クラスを設置。2015 年度以降、中等教育学校の生徒は住吉校舎に通う

◇**学級編成（住吉校舎）：**各学年普通科３クラス
現在、１年生（中1）から４年生（高1）までの生徒が在籍

◇**生徒数（住吉校舎）：**489 名（男子 237 名、女子 252 名）
2012 年９月１日現在

◇**特色：**「Kobe ポート・インテリジェント・プロジェクト」などの推進によって「グローバルキャリア人」の育成を図るとともに、体験学習や、異年齢集団によるさまざまな活動、地域社会との交流を取り入れ、心豊かな人材の育成に取り組んでいる。また、神戸大学の附属校として、グローバル人材育成事業（大学）と連携した英語教育研究、「グローバルキャリア人と時空間認識の育成」と「地理基礎」「歴史基礎」をテーマに、研究開発学校（申請段階）に取り組むなど教育研究を活発に行っている。